

講師 黒木 宏二さん【黒木碁石店株式会社 専務取締役】

第5学年総合的な学習の時間学習指導計画

1 ねらい

- 黒木さんのこれまでの経験や仕事に取り組む姿勢から、学び続ける意義や学ぶ姿勢について感じ取ることができる。

2 実施期日 平成28年1月21日（木）5校時（13：40～14：25）

3 受講児童数 第5学年2組 38名

4 指導計画（全3時間）

主な学習内容及び学習活動	時間	評価計画	外部人材活用の方法
1 事前学習 ① 「ものを知る」 はまぐり碁石について ・ 場所の写真 ・ はまぐり碁石の歴史 ・ はまぐり碁石の作り方など ② 「ひとを知る」 黒木宏二さんについて	1 時間	○ 担任が作成した資料をもとに、地場で頑張っている企業である黒木碁石店の情報を知ること、関心を深めることができる。 ○ 担任が製作した資料をもとに、黒木さんの経歴を知り、黒木さんの生き方について関心を深め、質問を考える。	
2 黒木さんからお話を聞く。	1 時間 (本時)	○ 黒木さんの経験を聞いたり、質問をしたり、友だちと話し合いをしたりしながら当事者意識をもって取り組むことができる。	経験と照らし合わせながら「学び続ける意義」や「学ぶ姿勢」について話していただく。
3 事後学習 ○ 黒木さんから学んだことを整理する。 ○ お礼の手紙を書く。	1 時間	○ 黒木さんからの学びを友だちと意見交流しながら、多様な考えを知り、まとめることができる。 ○ 整理した考えをもとに、授業を受けた感想を書くことができる。	

5 本時の学習の流れ

学習内容及び学習活動	指導上の留意点
1 外部人材との対面と学習の流れの確認をする。(4分) 2 黒木さんのお話を聞きながら、考えを交流する。(25分) 	○ メモを取ったり、話を聴いたりする際の注意点を確認し、疑問に思ったことは質問をするように促す。 ○ 黒木さんには以下の内容について話してもらうように、事前打ち合わせをしていく。 - 単元のテーマは「学び続けること」に関わって 「県外・海外での経験」「日向市での経験」の両面から - 学び続ける意義や学ぶ姿勢について → 強く思い、実際に行動につなげることが力につながる。(これが根幹になっている) ○ キーワードとなる言葉は、担任が構造的に板書していく。 ○ お話の聞く中で、要所で児童に問いを投げかけることで、外部人材と共に学んでいる姿勢をもたせる。
3 児童から質問する。(8分)	○ 黒木さんの話を聞いて、聞いてみたいことを近くの人とで話合う時間を設ける。 ○ これまでの外部人材の方のお話を思い出しながら、重ね合わせたり、比較させたりして聞かせる。 ○ ただ質問からの回答だけでなく、担任は関連質問や回答から思い立った質問など、舵取りを行う。
4 黒木さんからの学びを共有し、今から「思い行動できる」ことを考える。(6分)	○ 黒木さんの経験を聞いて、感じたことや学んだことをふまえて考えさせる。
5 黒木さんのお話を聞く。(2分)	○ 児童の考えも加味しながら話していただく。 - 日々悩んでいる。満足はできていない。 - 経験は全てにつながっている。県外や海外での経験(例えば交渉スキルなど)は今でも生きている。 - 答えはそれぞれであり、自分で強く思い行動することが大切、それが力につながる。今後(未来)をどうするかは、自分の思いや行動にかかっている…。

6 板書計画

未来を切り拓く3つの「生きる力」	
①強く想い・願う力 ②行動する力 ③外の世界に飛び出し、チャレンジする力	
黒木さんが思う『日向市(民)の良いところ』 - 礼儀正しく、人間性が素直なところ - 郷土を想い、郷土を愛する気持ちが強いこと - 市民のまとまる力(結束力)が強いこと - 気候が温暖で自然豊かなところ - 食べ物が安く美味しい、住みやすいところ - スポーツを通じた交流がさかんなところ - 芋焼酎をこよなく愛しているところ(大人限定)	黒木さんが思う『日向市(民)に足りないところ』 - 県外や世界の人々と『競争にさらされている』という認識。 - 闘争心(とうそうしん) ⇨ 『負けるもんか!』 - 新しいものを受け入れる、変化を恐れない気持ち 『県外や外国にモノやサービスを売ってほしい』という気持ちや動き。

1 はまぐり碁石の歴史

①『世界で唯一』の『はまぐり碁石』の産地 『宮崎県日向市』



碁石は昔、木や石から作られていました。その後、宝石からつくられ、貝がらを原料にし始めたのは、明治になってからのことです。当時は愛知県のはまぐりを原料として大阪で製造が盛んになり、日本一の碁石とされていきました。ところが、年々原料が減少しはじめたところのこと、大阪の碁石屋の主人、石橋小七郎（いしばしちろう）は、越中富山の栗原から日向（現在の日向市）に行商に来た際、珍しい貝がらに打ち上げられていたと驚かされ、番頭森元次郎（もりもとじろう）を日向につかわせました。元次郎がお倉ヶ浜に来てみると、これまで見たこともない見事なはまぐりの貝がら一面に打ち上げられていました。元次郎はさっそく貝がら採取にかり、毎日を夢中に過ごしたそうです。一方、大阪の石橋小七郎は、森元次郎から送られてくる貝がらの量が増え、原料を販売するようになり、小七郎によってはまぐり碁石は世に出ましたが、その碁石は名実ともに大阪の名産となり、またたく間に最高級品の名をほしいままにしました。

②『日向蛤碁石』は、『原田 清吉』から始まった。



原田 清吉

原田清吉は、「日向のはまぐりは我がふるさと日向で碁石に仕上げたい」という思いを持って、大阪で碁石職人になるため修行をしました。そして、碁石製造の技を会得した清吉は、心おとらせて日向に帰り、現在の日向市財光寺において、1908年（明治41年）に日向はまぐり碁石の製造にかかったのです。このことが始まりで、日向市ははまぐり碁石の生産地となりました。昭和20年頃には、全国の碁石生産量の90%を占めるようになった日向市。その後、大阪でははまぐり碁石の生産が終了し、現在では、日向市は日本唯一のはまぐり碁石の生産地となりました。碁石の原料は、現在でも様々なものがあります。石・ガラス・プラスチック・宝石…その中でも、碁目の美しさ、打った時の音の響きは、はまぐり碁石に勝るものはありません。そして、はまぐり碁石の最高峰とされる『日向産はまぐり碁石』は、手作りの本物が持つ独特な味わい、見た目、打ち味、手触り、音の響き、全てを兼ね備えた碁石です。今では、資源が枯渇し、日向産はまぐり碁石は『幻の碁石』となりつつあります。現在はメキシコ産はまぐりを主に使用しています。

③ 引きつがれる意思

黒木碁石店は、1917年（大正6年）、創業である黒木宗次郎により産声を上げ、創業者の理念とともに、二代目となる黒木一士によって、現在の黒木碁石店の基本思想が形作られました。『碁石を使うのは人であり、人は石と対話をする。そのため、石は天然の素材であると同時に、人の手によって作られる必要がある』という基本思想は、今も黒木碁石店に受け継がれ、機械化の進む現代においてもおよそ3ヶ月、24段階にも及ぶ工程の中、一粒一粒全ての職人が必ず一度は手に触れ、目で見て、対話をし、打ち手の意思を伝える石へと仕上げていきます。『碁石の文化が世の中に取り続ける限り、私たちの“ものづくり”に対する思想は変わらない』と考えます。



初代 黒木宗次郎



二代目 黒木一士



三代目 黒木重隆

2 黒木碁石店の碁石づくり徹底した選別基準

選別の基準となるのは、『形』、『色』、『碁目』、『キズ』です。『形』は理想の形である“マスターストーン”に批准しているかどうかで判断され、『色』はきれいな“白”であるかどうか、『碁目』は綺麗に通っているか、『キズ』はその有無で判断されます。この時点で、出来上がった碁石のうち2割程度が不合格となります。

形へのこだわり



蛇特有の碁目を美しく引き出すために、面鏡共に均等で自然な丸みに仕上げます。

碁石特有のゆれを生み出すために、凹凸の無い滑らかな安定感のある形に仕上げます。

違和感無く手になじみやすい様に、号数（厚み）に合わせて丸味に仕上げています。

破壊する確率を最小限に抑えるために、耳の厚みは約1mm程度に仕上げます。

3 はまぐり碁石製造工程



①くり抜き

はまぐりの貝がらから碁石の原料をくり抜きます。その際、碁石になった時の碁目や厚さなど様々な点から、「貝殻のどの部分をどうくり抜けばいいか？」を見極める必要があります。



②厚味選別

くり抜いた原料は、厚味ごとに選別されます。碁石は厚いほど価値が上がるため、できるだけ厚すぎず、薄いように厚さの選別をします。原料の厚さを測定して、可能な限り厚い製品にします。

薄い原料、厚い原料など様々な厚さの原料を厚味測定機で分類します。厚さがそろっていない場合は削り不足、削りすぎが発生してしまい、効率が低くなります。



③面すり

厚味をそろえた原料を一つ一つ、片面ずつ碁石の形に削っていきます。貝がらは熱に弱いので、とぎ石に水をかけながら削って冷やしながら独特の曲面を作っていきます。この工程は非常に難しく、職人の熟練の技と経験が不可欠です。黒木碁石店の碁石の『形』は、『マスターストーン』で厳格に決められていて、合っているものだけが製品になります。



④サラシ

白碁石は、『雲』のような白さが最高級とされています。しかし、白石の原料の貝がらは天然素材なので、真っ白というわけではありません。汚れや色シミなどをできる限り白くします。漂白液に漬けた後、天日に干す工程を碁石が白くなるまで繰り返します。天候や気温・湿度に左右されるため、1〜2カ月かかります。

⑤たる磨き



とぎ石でけずった碁石の表面には、細かい凹凸があります。この凹凸をけずって表面をきれいにします。たるに32kgの碁石を入れて、研磨剤とともに合計6時間ゆっくりとまわします。碁石と碁石がこすれ合い、研磨剤の効果もあって碁石の表面の凹凸が少しずつみかれます。最後に少量のろうで表面をうすくコーティングして完成です。



⑥選別

みがき上がった碁石は、1つ1つ人の目で選別を行います。選別は大きく分けて2つの選別をします。まずは品質選別。キズ、欠け、色、形、耳の厚さなどをチェックして不良品は外されます。次に、グレード選別。碁目、白さによって選別します。

黒木碁石店では、世界一厳しいと自負する選別基準によって厳選された製品を、日本はもちろん世界中の碁石愛好家の方々へ供給しています。



7 児童の感想

黒木暮石店 黒木さんのお話を聞いた感想

5年

黒木さんの説明や思いを聞いて、思ったこと、感じたことやこれからがんばりたいことをくわしく書こう。

黒木さんの説明を聞いて、思ったこと、感じたことは、黒木さんは、日向市のよいところや、足りないところをよく感じていて、日向市のよいところは、たくさん見つけていて、それから、感じたことを、すなおにいて、日向市の足りないところも、自分が、思ったことを、いって、すごいなど、思いました。そして、日向市の足りないところは、なおして、いこうという、気持ちがあるのかなど、感じました。これから、がんばりたいことは、生きる力というのを、はきできたらいいなと思う、強く思う気持ちと、行動する力、チャレンジすることを生かしていこうと思います。それから、日向市の、人口が、減少してきたり、高齢化が多くなってきたり、日向市を、いいところにして、いこうと思います。

「学び続ける」とは、生きる力を強くしていくことです。

黒木暮石店 黒木さんのお話を聞いた感想

5年

黒木さんの説明や思いを聞いて、思ったこと、感じたことやこれからがんばりたいことをくわしく書こう。

今回は、お話を聞かせていただきありがとうございます。黒木さんのお話を聞いて、何事も熱心に考えている人だと思いました。その理由は、みんなで20年後の日向市を考えた時に、黒木さんは、人口の減少などの心配ごとではなく、1人1人が行動をかえれば、未来は明るいと思うと言っていたからです。私はこの体験を生かして、発表をたくさんしたり、日向をもう1度くわしく見てみたいと思いました。今は、外に飛び出したりする事はできないけど、いつかいろんな事に挑戦できるようにになりたいです。これからもがんばってください。

「学び続ける」とは、すぐに行動を起こす。

黒木暮石店 黒木さんのお話を聞いた感想

5年

黒木さんの説明や思いを聞いて、思ったこと、感じたことやこれからがんばりたいことをくわしく書こう。

黒木さんのお話を聞いて、いろいろな事を学びました。その中でも特に、心に残っているのは、「外の世界に飛び出し、チャレンジする」という言葉です。私は、今まで、「大人になっても、宮崎が働き、やれそうな仕事につこう。」と、思っていました。でも、黒木さんのその言葉を聞いて、「いろいろな所に行、自分のやりたい仕事をしよう。」と考えるようになりました。黒木さんのおかげで、今までの自分の考えを、変えることができました。私たちは、あと少しで、6年生になるので、6年生でもたくさんチャレンジをしようと思いました。大人になったら、日向市を、もっと良いところになりたいです。

「学び続ける」とは、生きる力を見つける。

黒木暮石店 黒木さんのお話を聞いた感想

5年

黒木さんの説明や思いを聞いて、思ったこと、感じたことやこれからがんばりたいことをくわしく書こう。

わたしは昨日黒木さんのお話を聞いて、思ったことを紹介します。まず、わたしは中心にして、聞いたことは未来を切り拓くための3つの「生きる力」ということです。3つの中のまず、1つ目は、強く想い、原動力というものです。この言葉の意味は、あきらめないということです。2つ目は、行動する力です。自分を周りから見つめ、時を引きつけるような行動をすることです。3つ目は、外の世界に飛び出し、チャレンジする力です。自分からチャレンジすれば、いろんな人と出会えて、交流が深まていきます。そして、未来を切り拓くための3つの生きる力で、わたしは思ったことは、何かあっても自分の夢をあきらめないで、自分の思うことをどんどん発表して、はにかいことでも、正しいことなら、たまたまチャレンジすることをはかっています。

「学び続ける」とは、がんばって、信用をつま上げていく。

8 授業者の気づきや学び

黒木さんの日向市から県外や海外に出た経験と、だからこそ考えることができたこと（「これからの日向市のこと」や「これからの子どもたちに伝えたいこと」など）を児童は真剣なまなざしで聞くことができていた。児童の感想からも分かるように、3つの「生きる力」については、今の自分に置き換え、自分自身を振り返るとともに、これからどうしていきたいかを考えることができた。

こうした機会を増やし、児童がいろいろな価値観にふれる機会を今後も設定していく必要があると感じた。

